

I  
生  
活  
誌  
編

# 第一章 熊野町におけることばの生活

## ——方言——

- ① この稿は、多くの方々から、熊野町のことばを教えられたうえで、仕上げられた。それぞれの方々のお名前は記さないが、ここにその旨を述べて感謝の気持ちを表したいと思う。
- ② ここで取り上げた例は、いずれも、私の耳で聞きとったものである。中には、昭和十年代のものもあるけれども、それは、私が熊野町で生活していたときの記憶によるものである。
- ③ ここに取り上げていることばの例は、カタカナを用いて、発音の通りに表記している。ただし、必要に応じて音声符号を用いた場合もある。
- ④ アクセントは、カタカナ書きの右側に傍線を付して示した。すなわち、傍線の付してある部分は、音の高低部分を示しているものである。ゝの符号は、音が上昇することを表わす。
- ⑤ 年齢層の区分は、おおよそ次のようである。区分した時点は、昭和六十年代としている。

老年層 六五歳以上

中年層 三五歳以上

青年層 一八歳以上

少年層 一七歳以下

## 第一節 熊野町の方言

熊野ことば（熊野方言）とは

熊野町は、広島県の一町である。そのため、熊野ことばは、「ヒロシマベン」の一つである。また「ヒロシマホーゲン」と呼ばれるものである。古くは山陽道安芸国の中に位置していたため、「アキホーゲン」と呼ばれることもある。

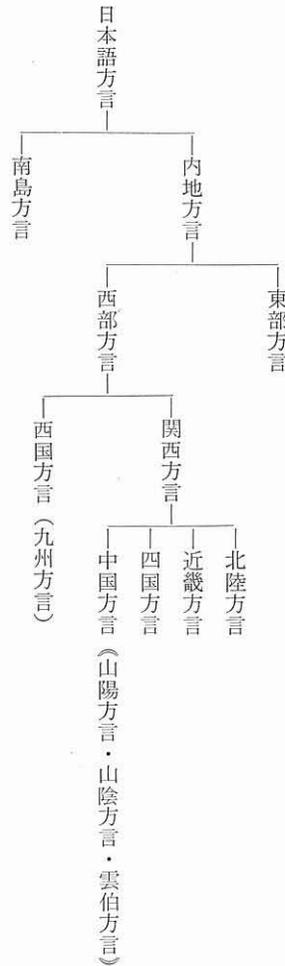
これまでに、熊野町のことばが、特に対象とされて、人の口にのぼったことはない。「クマノノ コトバ」とは、いっても、それは熊野町の人たちが、自分たちの使用していることばを指して述べている場合に限られている。他地の人々から、特に「クマノノ コトバ」のように言われることは、ほとんどないといってよからう。また、「熊野方言」として、特に取り上げられて研究されたということもなかった。このことは、熊野町の生活のことばの特徴、すなわち熊野町方言の性格が、「安芸方言」あるいは「広島方言」と呼ばれる地域方言中に存する一町、その一町としての方言上の特徴は有していても、熊野町方言としての独自性を、それほど濃厚に示してはいなかったということを物語るものである。いいかえれば、熊野町方言は、安芸方言の特徴は有していても、特に熊野町方言独自といえるような特徴を、それほど多くは有していないといえるのである。とはいえ、現状においては熊野町でしか聞かれなくなった事象、あるいは熊野町独自といえるのではないかと思われる事象もなくはない。これらに注目しつつ、以下の記述を進めてみよう。

全国から見た熊野方言の位置

熊野町方言は、全国から見ると、どういう位置にあるか。それが、安芸方言の中にあることはいうまでもない。

(7) 分派・系脈からの見方

安芸方言が、国の西半の地域方言の一つである、「西部方言」の中にあることは周知のことである。藤原与一氏の「日本語方言分派表」(『方言学』三省堂、一九六二年)によると、それは次の表のように示されている。



この表の中に、「安芸方言」という語は見られない。しかし、安芸方言が「山陽方言」の一つであることはいうまでもない。「山陽方言」は、「山陰方言」またそのうちの「雲伯方言」とも対立している。

「雲伯方言」には、「ソー ダラー。」(そうだらう。)のように、開音合音の区別がある。すなわち、これは、古く「アウ」と発音していたものが、「オー」とならず「アー」と発音されるようになっていたのを開音とい、「オウ」と発音されていたものが、「オー」と発音されるようになっていたのを合音という。このような両者の発音上の区別のあることを開音合音の区別があるというのである。そのほか、雲伯方言には、[i]母音が、いわゆる中舌母音の[i]に発音されるなど、数多くの特色が存する。安芸方言には、これらの事象は存しない。

雲伯地方と呼ばれる出雲、伯耆の地域も山陰地域の一部である。その地域の方言が特異であることは、よく知られている。ところが山陽地方に対立する山陰地方一般の方言、すなわち山陰方言は、山陽方言と異なっている

であろうか。広島県北部の山県郡などでは、山陰と同じように、「これは○○ダ」というように、「ダ」を使っている。石見地域でも鳥取県因幡地域でも、「ダ」を使っている。しかし、山陰と山陽との間には、やはり大きな差があるといわざるをえない。

「備後バーバー、安芸ガラス」という諺がある。備後方言では、「雨バー（ばかり）降る」のように言うという特徴を指している。これに対して、安芸方言の特徴としては、次のようなものを指している。

○ホイデ カー コマツテ シモータ イノー。(それで、ほれ、困ってしまったよねえ。熊野町、老男↓々)

この文中の「カー」は、心情をこめて、その主情的な思いをそのままに表現したものである。「本当に、この通り」という気持があるものなのである。このような「カー」を文表現の途中で多用するために、これをカラスにたとえて、「安芸ガラス」と呼んでいるのが、上述の諺である。備後方言と安芸方言との差の特徴的事象をよく表わしている。

安芸と境を接する山口県の周防との間にも大きな差が認められる。周防に一步入ると、「ノシタ(ねえ)」が、老人の口から聞かれるようになる。また、安芸以東では、

○サムイ ユテ イーヨツタ デ。(寒いといっていたよ。熊野町、青男↓々)

のように、「といて」という言い方で、「ト」が抜けていたり、「ユーテユータ」のように重ねて用いたりする傾向が強い。いわゆる「ト抜け」事象が存するのである。ところが、周防では、「〜チューテ」のように、「ト」の存在を確認することのできる形が用いられている。

安芸と海を隔てた四国地方の方言とは、アクセントなど、大きく異なっていることはいうまでもあるまい。近畿寄りの事象を数多くもつ四国方言と安芸方言との間には、異質的ともいえる差が認められよう。その状況が、

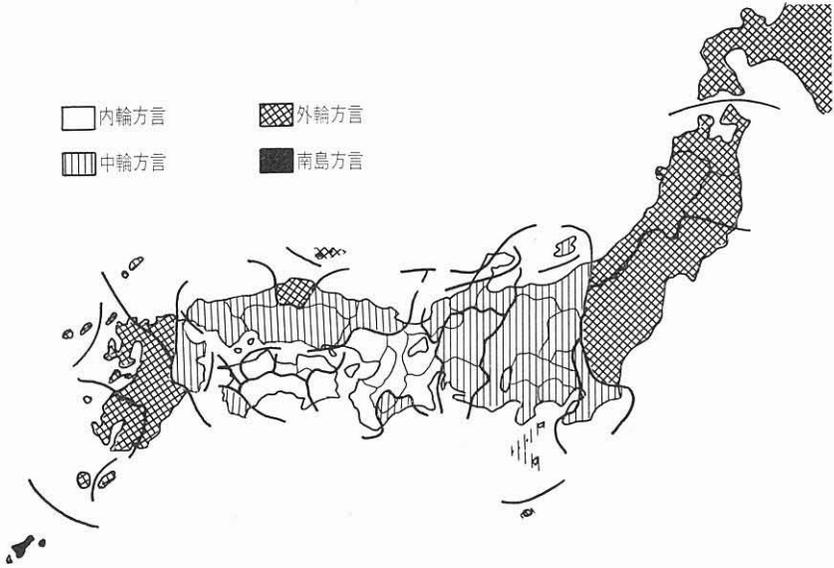


図1-1-1 金田一春彦の区画（『日本の方言区画』による）

右に示した「日本語方言分派表」にも見てとれるわけである。

(イ) 周囲論からの見方

日本語のアクセント体系を中心にして、金田一春彦氏は日本語諸方言を、内輪方言、中輪方言、外輪方言、南島方言のように地域区分をしている。内輪方言とは、日本の国の、ことばの中心であった京都を中心とする地域といってもよからう。次に、その外側をとりまく地域を中輪方言という。外輪方言とは、九州の大半、東北地方の大半をいう。南島の島々を除く、最も外側の地域である。金田一氏の地域区分の地図を示せば、上の図のとおりである。

安芸方言は、このうちの中輪方言に含まれる。金田一氏の区画について、氏が表の形で示しているもののうち、中輪方言についての地域区分を引用すると、次のようである。

(a) 標準乙種方言

1 東日本中輪方言

I 生活誌編

2 西日本中輪方言

i 濃尾方言

ii 十津川・北山方言

iii 中国方言（但馬と丹後の一部を含む）

iv 四国渭南地方方言

v 九州東北方言

(b) 擬甲種方言

1 北陸方言（佐渡を含み、越後と能登を含まない）

2 赤穂方言・長浜方言、その他近畿周辺の方言

3 熊野灘沿岸地域の方言

4 四国の東西宇和地方の方言（金田一春彦「私の方言区画」、『日本の方言区画』東京堂、一九六四年所収）

この金田一氏の方言区画論は、柳田国男氏の周囲論と相似たものである。柳田氏は、「かたつむり」という語詞をもって、国の中央地域である京都一帯から、四方にその語詞が波及して行ったという状況を明らかにしている。すなわち、日本の周辺の地方にこそ、古いことばが多く残存するという説である。これに対して、金田一氏の説は、アクセントを基本にして立説されたものだけに、京都を中心とする地域の方言ほど「保守的性格をもち、遠隔のものほどそれから崩れ発展して行った姿を呈する」とされている。両説は、相反する現象を論証したかのようにうけとられるが、それが相反するものではないといえるであろう。すなわち、中央語といえども古からの伝統を保持するとともに、自己改新しつつある。また、地方の方言も、常に中央語の影響のみを受ける

ものではなく、自らの中に改新する力を持っているからである。

熊野町の方言は、金田一氏のいう中輪方言に位置する。それは、濃尾方言・十津川方言などと並立的な関係にあるという。

○モ | オツ | チャ | ヤ | ノ | キ | チ | ヨ | ン | サ | ル | ケー | ハ | ヨ | イ | キ | ン | サ | イ | ヤー |。(もうおじさんは来ていなさるから、早く行くなさいよ。 中女 ↓ 老男)

熊野町で盛んに用いられている、このような「ンサル」と同様な「ンサル」が岐阜県下に広く用いられている。また、「餅米<sup>モチマイ</sup>」というとき、東美濃の土岐市、多治見市一帯では「モチマー」といい、「大工」を「ダーク」のように言っている。広島県の安芸地方でも、「赤い」を「アカー」、「ない」を「ナー」という。時には、「大工」を「ダーク」のようにいう人もある。これらは、[ai]という母音の並びが、[a:]となつてゐる事象である。一方、名古屋地方では、これらの事象が「アエー」と発音されていることは有名である。「ダエーク」のようにいわれているのである。広島県でも備後地域では、「ダエーク」のようにいう。国の中央部から東に離れている美濃と、西に離れている安芸・備後との近親性もうかがえる。

熊野町のことばは、国の中央から西に離れた安芸の一地のものとして存立している。そして、そのことばは、かつて国の中央であつた京都を中心とする地域の方言の影響をうけつつ、現在に至つてゐる。たとえば、語詞でも、「シンドイ」(身体がきつい)、「ケナリー」(羨しい)など、かつて中央語であつたり、現在もそうであつたりするものが、盛んに用いられていたりする。と同時に、「タバレー」(運べ)などのように、他の地域では聞かれないう独自のことばを生んでいる。変化・変動の末が、現況の熊野町方言だとしても、いったい、そこに、どれほどの特色が認められるであらうか。